付編４　遠江・駿河における緑釉陶器とその様相

静岡県埋蔵文化財調査研究所　平　野　吾　郎

静岡県内ではいまのところ緑釉陶器の出土は34遺跡で知られている。そのうち官衙推定遺跡は16ヶ所、寺院跡は４ヶ所である。他は性格が不明あるいは集落遺跡である。しかし量的にまとまって出土するのは、先にも述べたように、多く官衙推定遺跡あるいは寺院跡からの出土であり、集落跡からの出土は少なく、その受容が多く官衙あるいは寺院での儀式用のものであったことが知られる。しかし緑釉陶器に対する要望は強かったようで、猿投山古窯跡群・尾北古窯跡群、あるいは近江さらには畿内産の緑釉陶器が各遺跡に流入している。

出土遺跡数では遠江が16ヶ所・駿河12ヶ所・伊豆が６ヶ所であるが、集中して出土している遺跡はやはり遠江に多い。特に前半の猿投山古窯跡群産の緑釉陶器を多く出土する遺跡は遠江に多く、後半の近江産緑釉陶器あるいは東濃産緑釉陶器は駿河・伊豆にも広がっている。

緑釉陶器自体は小破片で出土することが多く、十分観察出来ないものが多いが、まとまって出土している遺跡を中心に観察を行い、各産地からの流入の状況を検討してみよう。

城山遺跡　図１－１・２　伊場遺跡に隣接する遺跡で遠江布智郡衙跡の中心と考えられる遺跡である。壺・坏・皿の３点が出土している。坏（1）は底部を全面に削り出した高台であり、器面外面は全体を篦磨きしている。胎土はやや黄味かかった白色で、十分精製していない。焼成は軟質である。おそらく畿内洛北産の緑釉陶器であろう。皿（2）は段皿である。この他に唐三彩の陶枕が出土している。

見附端城下層　図１－６～12　今川氏の居館と考えられている見附端城の下層に整地層・大型の掘立柱建物が検出されており、土器溜まりから須恵器・灰釉陶器に伴って、瓦塔・緑釉陶器が出土している。はやくから遠江国府跡に推定されている遺跡である。灰釉陶器は多く黒笹90号窯式段階のもので遠江での製品が多い。緑釉陶器は碗・稜碗・皿などがあるが、稜皿は内面に画花紋をもった輪花皿（8）で、外面は丁寧に篦磨きをしている。器面全面に丁寧に篦磨きを施した猿投山古窯跡群の製品と思われるものが多いが、なかに削り出しのいわゆる蛇の目高台を持ったもの（10）があり、畿内産と思われるものがある。また底部の破片ではあるが、張り付けの輪高台を持ち、底部内面に沈線を持ったもの（12）があり、近江産と思われる。また内面に篦磨きを施し、底部外面にナデ整形をした破片があり、釉も濃緑色に発色していることから近江産かと思われるが、胎土が灰色で良く焼けたいわゆる硬陶であり、あるいは尾北古窯跡群の製品かとも思われる。

梅橋遺跡　図１－18～25　原野谷川の下流域にあり、原川遺跡・坂尻遺跡などと一体になった遺跡で遠江佐野郡衙跡の一部を形成する。ＳＤ01と呼んだ幅20ｍ、深さ３ｍの人工の水路から出土したもので、多量の灰釉陶器を伴出している。灰釉陶器の中心は黒笹90号窯式段階の物であり、遠江（清ヶ谷古窯跡群）の生産品が多い。18点の緑釉陶器が出土しているが、全て破片で完形品はない。大型の手付き瓶（19）を除いて他は全て碗・皿であるが、施釉のしていない素地と思われるものが１点含まれている。皿には花弁の画れているものが４点あり（20～21・24～25）、手付き瓶にも胴部に花紋が画れている。碗・皿の大半は張り付けの輪高台で、器面の内・外面に丁寧に篦磨きがしてあり、内面に重ね焼きのトチンの跡が観察できるものがある。胎土は白色で、良く精製されており、焼きはあまくいわゆる軟陶のものが多い。画花紋のあるものを含め、猿投山古窯跡群の製品であろう。他に１点削り出しの輪高台のものがあり、底部を含め全面に刷毛塗りで施釉しており、明らかに畿内産（22）である。この他掛川市教育委員会が

調査した地点でも小破片が3点ほど出土している。

坂尻遺跡　図1－3～5　小破片であるが5点が出土している。碗・皿・段皿がある。器面全面に篦磨きがあり、猿投山古窯跡群の製品と思われる。

原川遺跡　図1－13～15　素地を含めて39点が出土している。全て小破片であるが、なかに画花紋のあるものが含まれている。包含層からの出土で遺構に伴うものはない。碗・稜碗・皿があるが香炉と考えられる破片が1点認められる。碗・皿は内・外面ともに丁寧に篦磨きを施しており、釉は底部外面を含め全面に施している。トチンの痕を残すものが多い。高台には熊の前古窯で観察されたいわゆる埋込式高台が含まれている。また素地は3片出土しているが、やはり内・外面を丁寧に篦磨きを行い、内面に花紋を持っている。大半が猿投山古窯跡群の製品と理解されるが、一部に体部の篦磨きの少ないもの、あるいは底部外面（高台の内側）に施釉しないものがあり、あるいは尾北古窯跡群の製品を含め他地域の製品が含まれている可能性がある。しかし梅橋遺跡とともに明らかに近江産と考えられる緑釉陶器は含まれていない。

神明原・元宮川遺跡　図1－26～30　静岡平野の東部にあり、駿河国有度郡の郡衙に近接する地域であろうと推定している。大谷川改修に伴って大規模に調査をした遺跡で、15点の緑釉陶器が出土しており、碗・皿・小碗がある。皿・稜皿は器面の内・外面を丁寧に篦磨きしており、内面にトチンの痕が見える。低湿地にあったことから釉の色は変化が多いが、これらの多くは猿投山古窯跡群の製品と理解できる。碗・皿に1点ずつ明らかに近江産と判る緑釉陶器（28）がある。皿は底部糸切り痕をそのまま残し、高台の内側に段がある。胎土は良く精製されているが、焼成はあまく柔らかである。碗は底部付近の破片で、胎土・釉調は先の皿と良く似ている。また内面の底近くに沈線が一条通っている。張り付け高台で、やはり高台の内側を欠いている。この他に底部全面を削り出した碗（30）がある。底部を含め、器面全面を篦磨きをしており、焼成はあまく軟陶である。釉は底部を含め全面に施しているが、内面には刷毛の痕が見える。おそらく畿内の洛北の製品であり、比較的古い段階の緑釉陶器と言うことになろう。

居倉遺跡　図1－31～34　小破片であるが、出土点数は多く146点が報告されており、楢崎彰一氏によって尾北古窯跡群（篠岡古窯）・東濃古窯跡群・小塩古窯、石造り古窯などの洛北・洛西の緑釉陶器が含まれているとされている。猿投山古窯跡群・近江産の緑釉陶器は含まれていないようである。伴出した灰釉陶器の多くが折戸53号窯式以後のもので、中心となる時期が新しいことを考慮すれば、猿投山古窯跡群産の緑釉陶器が含まれていないことは理解が出来る。

緑釉陶器を多く出土する遺跡のいくつかをみてきたが、それらの出土状況を再度整理してみれば、猿投山古窯跡群産の緑釉陶器は黒笹90号窯式の灰釉陶器に伴って出土するものが多い。とくに在地での灰釉陶器の生産が本格化する黒笹90号窯式の後半に出土すると思われる。これは内荒遺跡では黒笹14から黒笹90号窯式にかけての灰釉陶器が中心であり、緑釉陶器の出土は少ないこと、これに対して梅橋遺跡（ＳＤ03）では在地産の灰釉陶器が中心で黒笹90号様式に比定されている清ヶ谷古窯跡群宮東古窯段階の遺物が多いが、これに伴って猿投山古窯跡群の緑釉陶器が多く出土していることなどから知ることが出来る。このことは猿投山古窯跡群では黒笹14号窯式段階に一部で緑釉陶器の生産が始まっているが本格化するのは黒笹90号窯式段階とされていることとも一致している。

また神明原・元宮川遺跡、城山遺跡などから畿内産の緑釉陶器が出土しているが、その点数は多くはなく、また洛北の幡枝古窯産と思われる比較的古い段階のものが多い。

猿投山古窯跡群産の緑釉陶器はもちろん寺院跡からも出土しているが、出土遺跡の数・出土量共に官衙推定遺跡での出土が多い。このことは初期の緑釉陶器の需要が寺院だけでなく官衙において強かったことを表している。

近江産緑釉陶器は折戸53号窯式段階以後の灰釉陶器に伴って出土している。東濃産の緑釉陶器も同様

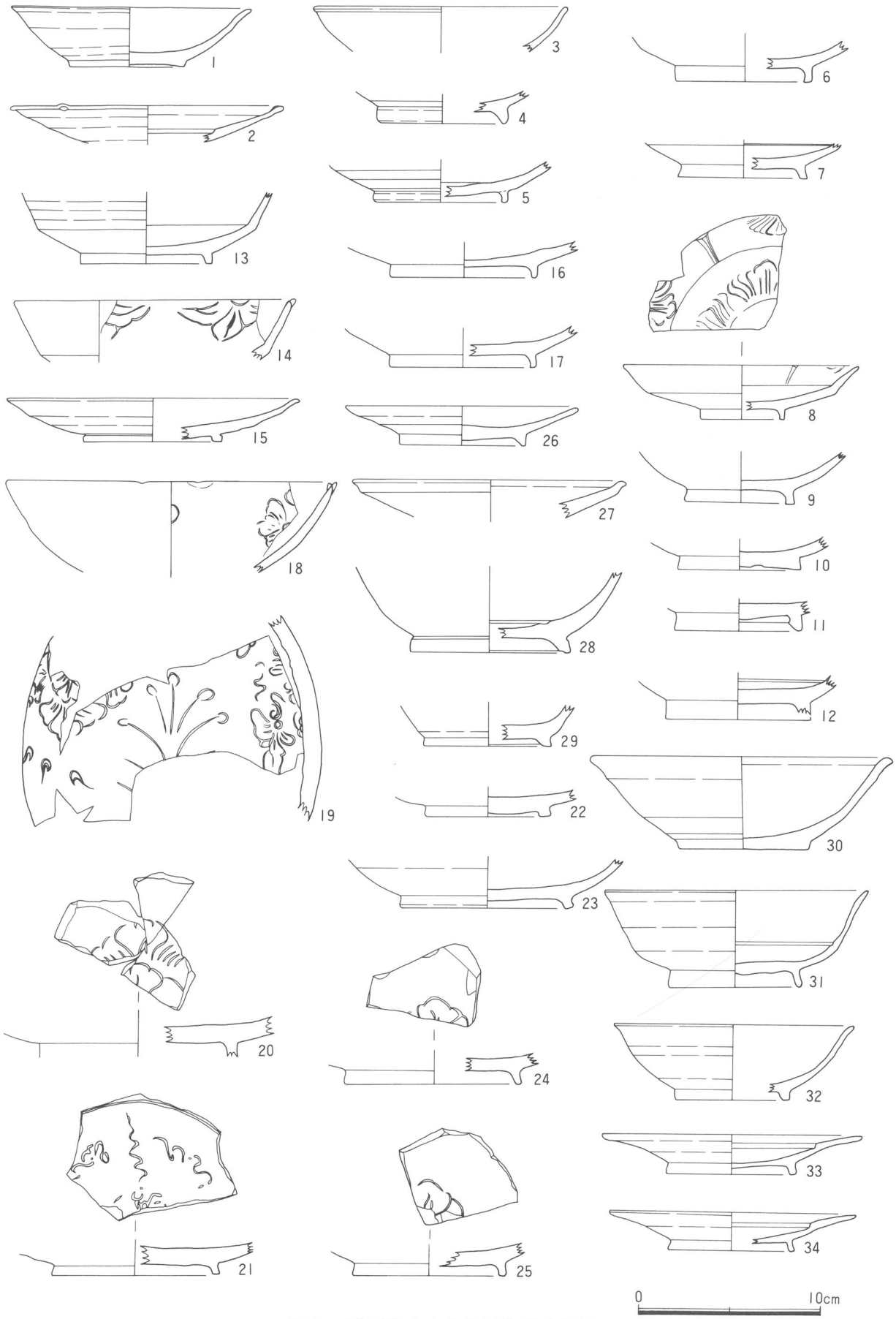

図１　静岡県内出土緑釉陶器実測図

で、両者は出土状態も良く似ている。これは猿投山古窯跡群での緑釉陶器の生産が比較的早い段階で縮小し、そのあとは主要な生産地が東濃あるいは近江に代わっていることを反映していると思われるが、その出土は大千波峠廃寺・修善寺裏山など寺院跡からの出土が目立っている。このことは、この段階の緑釉陶器がこの時期に盛んになってきている密教系寺院での法具としての使用が多かったことを示していよう。

また近江産緑釉陶器は横山遺跡あるいは能島遺跡などで見るように単独で出土している場合があり、特に前者では竪穴住居跡から出土している。従ってこの時期には緑釉陶器が官衙・寺院などだけでなく、かなり広範囲に広がっていることが考えられる。また官衙推定遺跡での出土が比較的少なくなっているが、これは近江産緑釉陶器が流入し始める段階には地方の官衙遺跡が衰退を始めていた結果であろう。

こうしてみればこの地域の緑釉陶器の出土状態は、当然のことながら時間差を含めた生産地間でのあり方を反映しており、前半（黒笹90号窯式段階）では猿投山古窯跡群の製品が多く、後半（折戸53号窯式段階以後）には近江産緑釉陶器あるいは東濃産緑釉陶器が流入している。また前半には寺院跡からの出土も認められるが、官衙推定遺跡での出土が多いのに対して、後半には寺院跡からの出土が目立っている。しかしこれは前半と後半とで緑釉陶器の使われ方が異なったことによるわけでなく、官衙推定遺跡の多くが、近江産緑釉陶器が流入し始める段階には機能を縮小し始めたことによろう。